木のぬくもり

太っぱらマン、買い占めばばあを撃退する

～世の中には2種類の人間が存在する。
　1種類はケチくさい人間。もう一種類は太っぱらな人間である～

「うわぁ、嫌だなぁ…」

日曜日、開店直後のスーパーマーケット。
その女性店員の前には3人の親子が順番を待っていた。細くつり上がった目が3人とも同じだった。先頭は母親、2番目には中学生くらいの息子、最後に小学生の娘が並ぶ。全員がお米をひと袋ずつ持っていた。

買い占め防止の為、このスーパーではお米の販売には数量制限がされている。お米は1人ひと袋までと決められていた。

女性店員は弱った顔でその家族を見る。

「1人ひと袋まででしょ？」別々に会計をすればいいんでしょと母親は強気に振る舞う。
「あ…はい…」女性店員は、仕方なく会計を始めた。

と、その時。

トーゥ！スタッ!!
レジ台の上に1人の男が舞い降りた。

レインボーカラーの全身タイツ、頭にはアンパンマンのかぶりもの。手足は細長いが、お腹だけは異常なほどほっこりと優しく膨らんでいる。

「太っぱらマン、参上!!」男は大きな声で叫んだ。「はっはっはっ、お待たせしたね。美人店員さんよ」甲高い声がスーパー中に響き渡る。男はビデオカメラを右手に構え、母親から順に、3人の姿を撮り始めた。

「な、なに奴!?」強気な母親が一瞬たじろぐ。

「お前たちの姿はこのビデオに収めた。助け合いの時期にお米を買い占めようとは、ケチくさいばばあだ」
「きさま…何をする気だ…」
「ふ、教えてほしいかこのケチくさババア!! これからマンガ喫茶に行ってこの動画をyou tubeにアップしてやるんだよ！」男はマンガ喫茶の割引券をピラピラとはためかせる。
「な、なにぃ!!」
「お前のケチくさい顔が全世界に丸出しになるぞコンチクショー！」

「きさま…」母親は歯をきしませる「おい小娘っ!! やっちまいな！」
「へいっ、母上！」娘はさっと飛び上がり、男の手からビデオカメラを奪い取った。

「なっ何しやがるコンチクショー!!」男は悲鳴混じりに叫んだ。
「形勢逆転だな。地球がきさま中心に回っていると思うなよ」母親は言う。「これでもう撮れまい」

「くそう…」男は一瞬悔しがると、今度は笑い出した。その高い笑い声がスーパー中に響く。「だからお前はケチくさいって言われるんだ、このケチくさばばあ!!」

「何い!! ビデオはこっちにあるんだぞ」
「それは、ダミーだ」

男がそう言うと、母は娘の方を見た。

「はっ!?　何だと？おい小娘っ!!」
「これ…おもちゃです」娘は驚いて言った。
「甘いんじゃあ、このケチくさばばあ!!」

「こ、こしゃくなマネを…」
「本物のカメラは俺の腹にしまってある。この腹をなめるなよ！だてに太いわけじゃねえぞコンチクショー!!」

男は鼻をほじっていた指をビッと母に向けた。
その指先は、光に反射し瑞々しく輝いている。

「お前たちの意地汚いくされ顔を全世界にさらしてくれるわ！」
「ひぃぃ、それだけは…。どうかご勘弁を…」母親は腰から砕け落ちた。

「嫌なら、そのお米を、手に持っているお米を返すんだな」
「は、はい…。おいっ」母親があごを動かすと、子どもたち２人は3つの米袋を持って売り場に戻った。

「ふっ、話せば分かる奴だな…。お前も懐が淋しかろう。これはオレが持っているお米全部だ。くれてやる。食え!!」男はそう言うと、お腹の中から山盛りになったご飯茶碗をひとつ取り出した。

「でも、これはあなたのご飯じゃ…。そんなことをしたら、あなたが…」
「いいんだ、お前たちにくれてやる。食え！いま食え!!　ここで喰らえ!!」

「あ、あぁ…太っぱらマン…」母親の頬に一粒の涙がこぼれた。「こめが…おこめが…うまいです…」

家族が外へ出ると、空にはキレイなご飯雲が泳いでいた。
母親は子どもたちに、今日のことは一生忘れるなと言った。

太っぱらマンは、今日もケチを撲滅すべくパトトールを続けている。

（おわり）

太っぱらマンの募金活動

～世の中には2種類の人間が存在する。
　1種類はケチくさい人間。もう一種類は太っぱらな人間である（By太っぱらマン）～

春の陽ざしが暖かく街を包んでいた。

その女はコンビニに入りでペットボトルのお茶を1本買った。

「５３円のお返しです」

女はお釣りを財布にしまう。
そして出口へ向かおうとした瞬間、後ろから女を呼びとめる声が聞こえた。

「ちょっと待ちやがれ！そこの女！」

甲高い声が、コンビニ中に響き渡る。

トーゥ！スタッ!!
レジ台の上に1人の男が舞い降りた。

レインボーカラーの全身タイツ、頭にはアンパンマンのかぶりもの。手足は細長いが、お腹だけは異常なほどほっこりと優しく膨らんでいる。

「太っぱらマン、参上!!」男は大きな声で叫んだ。

「そこの女、今レジ横の募金箱をチラ見しただろう」
「…それが何か…？」
「それが何かだとコンチクショー!!そのひんまがった根性がくさっとるんじゃ～!!」興奮した男は声を大きくした。

「女、今お釣りが53円だったから募金するのをやめたんだろ？」
「なに…」女は視線を鋭くする。
「10円以下なら募金しようと思ったけど、53円はもったいないと思ってやめたんだろコンチクショー！！」

女の表情が一変した。食いしばった歯をむき出しにして見せる。

「き、きさま…なぜそれを…」
「てめえの考えていることくらいお見通しじゃ！このケチくさババア!!」

男はふわりと舞い上がり女の前に降り立つと、さっと財布を奪い取った。

「きさま…」
「そこのケチくさババア！見てやがれ!!」

男は財布の小銭入れを開けた。

「何をする気だ…」
「へっへっへぇ～、何をすると思う？」

男は財布の中から硬貨を取りだす。
53円だ。

「ま、まさか…」

男はニヤッと笑った。

「うぁ～～～～～やめろ～～～～～っ」

チャリン、チャリン…。
53円は男の手から、募金箱の底へ落ちていった。

「き、きさま…」

女は男の胸ぐらをつかむ。ぷるぷると腕をふるわせて男を睨みつける。
そして、女がグッと腕に力を入れた瞬間…

ピリリリ…

男の全身タイツが裂けた。

「て、てめぇっ何をする！！」
男は女の腕を振り払いさっと胸を隠す。

「その胸…7つの傷。きさま、もしや…」

女はガタガタと震えだした。

「お前が本当にしたかったことを代わりにしてやっただけさ」

男ニヤッと笑うと店を走り出ていった。

「あ、あぁ、…さん、 ありがとう。
　ケンさん…いや、太っぱらマン…あべし」

女はその場に崩れ落ちた。

春の陽ざしが暖かく街を包んでいた。